耳底に刻まれたうめき声

こころの風景

井出　孫六

裁判長が書面に目を落としたまま「原告らの請求をいずれも棄却する」と、傍聴席には届かないほどの低い声で主文を読み始めた途端、記者たちが一斉に席を蹴って外へ駆けだしていった。そのあと、奇妙な静けさの中で「訴訟費用は原告らの負担とする」という冷酷非情な主文の2行目が追い打ちのように続いた。

老後の不安を抱える「中国残留孤児」が国家賠償を求めて起こした民事訴訟に対し、1月30日、東京地裁は原告側の主張を全面的に否定・棄却し、人びとの心を凍りつかせた。

2カ月前に出た神戸地裁の判決文とこの日のものとでは、天と地ほどの差が露わになった。前者が旧満州に展開した国の歪んだ植民政策の非を客観的に説き明かしたのに対し、後者の歴史把握は構成力を欠き、孤児発生の原因をひたすらソ連侵攻に求めるという視野狭窄を露呈した。前者が孤児の経歴に110頁を費やしているのに比べ、後者はわずか12頁ですましているところに、立脚点の在り処が示されている。

当日は法廷に入りきれぬ数百の原告らが裁判所前に集まっていた。不当判決が知らされた瞬間、怒りを噛み殺すうめき声が空気を震わせ、耳底に刻みつけられたと、彼らとともに待っていた知人が伝えてくれた。それは戦後半世紀、父祖に代わって侵略の刻印「日本鬼子」の名を背負ってきたものの痛哭だったのではないか。

（作家）